

第六章
近代

はじめに

領主が取り上げた年貢が経済基盤で、士・農・工・商の格差のもとに維持された封建社会も、幕府あつての領主で、幕府が一旦崩れると、領主及び武士たちは、名儀だけを残して実質的には最も早く崩壊した。武士以外の階層のうち、特に工・商の二階層は、維新时期を界とし、蓄積した資本力にものをいわせて経済の主導権を握るようになった。ただ農民だけは相変わらず地主制の枠内に閉じ込められ、身動きできない状態であった。しかし、工・商の抬頭は日本を大きく変えた。それまで諸外国は、日本を独立国と見ていなかったのかも知れない。それは、外国の教科書が日本を教える場合、明治維新から説き始めている〔『日本の歴史』読売新聞社刊〕ことでも明らかであろう。つまり、外国人には明治維新から国らしい国に見えたのである。ちっぽけな東洋の島国日本が、一八世紀から一九世紀にかけて、アジアに吹き荒れた帝国主義の嵐の中で、無事生きのびたこと自体奇跡なのかも知れないが、その日本が漸く顔を出し得た世界の中で、忽ち頭角をあらわして列強の仲間入りできたことについては、明治人の偉大なエネルギーに驚嘆せざるを得ない。

しかしその一方で、華やかな舞台があやまった筋書で動かされていたことも見落してはいけぬ。筋書の誤りの一つは、帝国憲法に見られる。天皇を現神とし、国家機構の頂点に据えたことは、日本の近代化を目指した明治人の矛盾であった。この矛盾は、教育勅語を国民教育の背景とした偽政者によって隠され、更に日清・日露両大戦の勝利はこの矛盾を完全に打ち消したかに見えた。しかし、その間に大きく根を張った矛盾は、昭和になって暗黒の芽を出すことになる。この章では、そうした流れの中での白鷹町を見ていきたい。